

MAWĀLĪ について (補 言)

中 村 満 次 郎

IV

本誌「西南アジア研究」第3号所収の「Ma-wālī について」の補言をする。

アハマド・アミン氏が「イスラムの朝」(Du-hā al-Islām) で取扱った時代、即ち、前期アッバース朝は、同氏によれば、「第一アッバース朝」(al-asr al-abbāsī al-'awwal) であって、それは、as-Saffah がカリフに就任(749 A.D.)してより、al-Muhtār (868 A.D. カリフに就任) の治世にいたる迄の時代である。同氏はアッバース朝をこの前期とそして後期との二時期に分けて考察しているのであるが、後期を取扱った著書「イスラムの正午」(Zuhr al-Islām) は筆者未見である。

さて、「イスラムの朝」の序文において、アハマド・アミン氏は、オンマヤ朝が興起したその間の事情について、この二つの王朝の間には、歴史上明白な断層があるという見解は真理から程遠い、成程、アッバース朝は、イスラムにとってもアラビア語にとっても、この両者の発展のための温床ではあったが、アッバース朝の興起自体が、この宗教と言語にとって、新しい歴史のページを開くものではなかった、とその事実を強調している。

そしてまた、この時代を考察する上において重要なものとして、文字通り無味乾燥な沙漠にイスラムの文化が栄えたのではなく、灌漑農耕地 (Ha-zārat) にその地理的環境を求めることによって、イスラムの文化が成立したのであって、ペルシャ

の影響、シリヤからイラクへの遷都、といった歴史的実はその付随的なことである。とその序文に明記している。これは Ibn Khaldūn の学説と共通するものを持っている。

アハマド・アミン氏が、第一章第二節「Arab と Mawālī との抗争」において、アッバース朝となっても、アラビアの種族と種族との抗争はその跡を絶たないで、アラビアが国家として統一達成していくことを妨げたことを述べているのは故なきことではない。同氏は次の如く言う。

「イスラムが興って、アラビアは國家を形成した。宗教の確立、言語の統一、そして政府機關の設置によって、その資質は整った。当時のペルシャとビザンツの二帝國の領土にその勝利の跡を刻むのである。しかし、この事実と平行して、アラビアの種族的精神は存続したのであって、ここに二つの思潮が併存した。即ち、(種族としてのアラビア、そして部族へ、そしてその部族の一部へと流れる、種族的思潮)と、今一つは、(アラビア人の血統が、アラビアの國家を形成し、汎アラブ主義となる思潮)とであって、この二つの思潮がイスラムの発展の母体となった。」

「第一の思潮について言えば、それは種族的な愛國心といえるものであって、オンマヤ朝における史話、あるいは詩歌はこの思潮を物語ってやぶさかではない。

Yahī ibn Ḥayyān を称えた詩句：

アッラーは、イエーメンのすべての人たちを、奴隸、Yahī ibn Ḥayyān のための身代金となることを望まなかったか。

また若し、自分に愛国心がないのであれば、アッラーは Ma add ibn Adnān の数千人にも匹敵するように Yahā ibn Hayyan をしなかつたか。

だが、私は自分の種族を好まない。私は彼を好むのあまり、Qaḥṭān の子孫を好むのである。

あるいは、マスーデイの語る『ニザール族 (Nizārīyat) はイエーメン族 (Yamānīyat) にたいして誇り、またイエーメンはニザールにたいして誇っていた。そして人々は集団をつくり、沙漠においても、灌漑農耕地においても、民族意識は高揚し Amr Marwān ibn Muḥammad al-Ja dī はニザールの人々を結集して、イエーメンに対せしめ、イエーメンは、ニザールをさけて、アッバース朝のもとへ合流したのである。』等は、この第一の思潮を物語っている。

このような史実は数多くあるのであり、我々がここで当面の問題として考察すべきことは、第二の思潮である。即ち Mawālī に対する Arab の社会思潮である。」と。(p. 20~22)

即ち、アハマド・アミン氏が「Arab と Mawālī との抗争」において取上げた主題が、この第二の思潮であったのである。

V

ここで、B. Spuler 氏の Mawālī についての見解によれば、Mawālī を Die Klienten とし、彼は al-Muḥtar に多大の関心を示しているのである。しかし、対アラブ示威運動としてのシュービーヤ運動 (ash-Shu ubīyat) についての、アハマド・アミン氏の見解をここに披瀝することにより、筆者は、同氏の Mawālī についての見解をより明白にできればと思うのである。

さて、アハマド・アミン氏は第一章第三節、「シュービーヤ運動」において、「前節において

考察したことより、この前期アッバース朝を、三つの社会思潮 (naza at) が支配した。」と言えよう。」と述べている。即ち、

- (1) アラブはすぐれた民族である。
- (2) アラブはその他の諸民族と同等である。
- (3) アラブは必ずしもその他の民族にすぐれたものではない。

この三つの社会思潮であって、そして、第二、第三の思潮を支えるものがシュービーヤ運動である、としているのである。

人々の語るところによれば、Mirbad に人々が集まっていた。そして、そこに Ibnu'l-Muqaffa がいた。彼は人々に「どの民族がすぐれているか？」と尋ねた。彼らは顔を向きあつた。そして、彼らは、Ibnu'l-Muqaffa は多分ペルシャ人を望んでいるだろう、と語り合つて、「ペルシャ人」と答えた。そこで、彼は言った、「そうではない。ペルシャ人は広大な土地を統治した。また、彼らは偉大な帝国を樹立した。そして多くの人民を支配した。しかし、彼らは知性で物事を解決はしなかつた。彼らは彼らのうちに、求道なる知恵 (神の言葉) を創造しなかつた。」そこで人々は「ギリシャ人」と言った。「彼らはアルテザンである。」と答えた。「インド人」「彼らは哲学者である。」「スダーン人」「彼らはよこしまである。」「それではどの民族か。」「アラブである。」と彼は言った。そこで、人々は笑つた。Ibnu'l-Muqaffa は言った。「私は貴方たちに同意を求めない。しかし、それは血族的な配慮においてであつて、その知識についてはそうではない。アラブは自分たちとは相違した民族を統治した。史跡は残されていない。彼らはラクダ飼いであり、また羊の持主である。荒野の住民である。ある者は自然に恵まれ、熱情にすぐれている。また些事にも、困難にあつても、よき隣人である。物事を知性でとらまえ、そこに模範があり、それ

を行う。」云々。(p. 51-52)

第一の、アラブはすぐれた民族であるという思潮は、汎アラブ民族主義以前の、狭義におけるアラブ民族主義といえるのであって、上記の Ibn' l-Muqaffa についての挿話は、この思潮に属するものである。

次は、アラブは他の諸民族と同等であるとする第二の思潮である。これは、コラーンの一節、*これ、すべての人間どもよ、我らは、お前たちを男と女に分けて創り、お前たちを多くの種族に分ち、部族に分けた。これはみなお前たちをお互い同士よく識り合うようにしてやりたいと思えばこそじゃ。*』(49-13)に由来するところのものである。ハデイスに「アラビア人はなんら異国人にすぐれるものではない。唯、力が勝っているだけである。」ともいうと、アハマド・アミン氏は述べているのである。

第三の思潮についていえば、ギリシャがその広大な領土を誇示し、インドはその科学や思想を誇り、シナがその産業を誇っていたときに、アラブにはなんら顕著なものはなかった。無明時代においては飢えのため、子供を葬る風習だっている持っていたのではないか。イスラムは、唯、アラブのみの宗教ではないのである。『なんと言っても信者はみんな兄弟じゃ』(コラーン 49-10)。イスラムは人類の宗教である。即ち、このような理念がこの第三の思潮を形成したのである。

以上が、前期アッパース朝における思潮であって、(ash-shu ūbiyat) は後者の二つの思潮を意味した。はじめ(ash-shu ūbiyat)は、アキブでもその他の諸民族にとっても、貴賤という点については優劣をつけえない。という意味で用いられたのである。それ以前は、平等を意味する(al-masāwāt)と、民族は平等であるを指す(ash-shu-ūb)とに由来する名称が用いられていたのが、その後、後者の語を以て、(ash-shu ūbiyat)という呼称が成立したのであった。このようにして、はじめ第二の思潮を意味したのであったが、間もなく第三の思潮を意味するものとなった。それは、歴史的発展によるものであって、オンマヤ朝においては、第一の思潮が支配的であった。そして、Mawālīの出現により、平等を意味する(al-masāwāt)がさげばれ、ar-Rashīdと al-Ma mūnとの時代となるにおよんで、その権威と力を自覚し、アラブの力を削ぎ、その他の民族の権威を高めんとする第三の思潮が明白となって現われて来たのであった。明らかに、シェービーヤ運動は第二、第三の思潮であったのである。

ここで、筆者はペンをおく。「Mawālīについて」と題して、二回にわたり、エジプトのイスラム学者、アハマド・アミン氏のアッパース朝についての見解を紹介したのであったが、素より、同氏の見解の一端であって、微力な筆者には全く手にあまるものではありませんが、ご参考にれば筆者の喜びとするところです。諸賢のご叱正をたまわれれば幸甚のいたりです。